

久保 明彦さん●料理旅館「幾松」専務取締役

連帯のこころで床の文化を守る

夏の京都といえば鴨川の納涼床。この伝統文化を守る鴨涯保勝会の会長を務める久保さんは、幕末に桂小五郎が度々足を運んだことで知られる木屋町の旅館「幾松」の四代目です。自ら経営者でありながら私利私欲に走ることなく、広く長い目で、京ならではの文化を守り続ける町衆リーダーの人物に迫ります。



くぼ あきひこ
1954年生まれ。
1970年香里中学校、1973年香里高等学校、1977年大学工学部卒業。百貨店勤務を経て24歳で「幾松」へ。現在「幾松」専務取締役、鴨涯保勝会会長。

伝統文化の継承に意欲を燃やす 納涼床の「ご意見番」

——いま大河ドラマ「新選組！」の影響で、京都を訪れる観光客が増えていますね。幾松さんもお忙しいことでしょうか。

久保 観光客は本当に増えていきますね。私たちは少人数のお客様を途切れなくお迎えし、次もまた京都に来たいと思っていただけるようなサービスを心がけている宿です。社員が休みを取れないほどお客様が増えて本当にありがたいのですが、うちの本質的な仕事はややできにくくなっていますね。今年は正直申しあげて困っているところですよ（笑）。

——ご繁盛なのですね。

久保 でも私たちは「自分のところだけ来てくれはつたらええ」という商売はあまりしたくないんです。京都という街の気に入つてさえただければ、利用された旅館や店に対して良い印象を少しでも持つていただければ、また次の機会に「行ってみよか」となるでしょう。そういう気持ちでお越しいただければいいんです。

——鴨涯保勝会の会長をしておられるのも、京都全体が活気づいてくれればというお気持ちからなのですか。

久保 会の事務局長をしていた関係もあって、前会長が亡くなられた後をお引き

受けしました。営利団体をまとめているので、それぞれ自分勝手な意見も出て大変です。もつと儲けられるようにしてくれへんかとか、どちらかという私のポリシーから外れることをおつしやる方が多い。入会するのも床の占有料を払うのも、すべてお金の要ることですから致し方ないことやとは思いますが、それで会長になつてから最初の2年間は、あまり波風立てずにやってきました。でも、なし崩し的に2期目もさせられるとなると、それなら好きなようにやるぞということ、今はかなり厳しい意見を言わせていただいています。

——床の伝統を守るためにはさまざまな

ご苦労がおりとお察しします。

久保 役をするのが嫌だというわけでは、決してないんです。夏場、暑い京都では集客方法が非常に難しいんですよ。その時期に、もちろん企業努力もあるからですが、鴨川の床は比較的繁盛している。そこで、儲けを期待して床を開業したいという方がわりとおられるんですね。でもそれではあかん、そういう気持ちだけでやるんやったらやめてくれと、いつも言うんです。京都府が管理する一級河川の鴨川の、しかも二条から五条までにお店を持つ業者さんだけが出せるのが鴨川の納涼床です。そこをきちつと考えてほしいのです。床では規則として歌舞音曲は絶対禁止。マイクだめ、鳴り物だめ、舞もだめ。でも、そういう厳しい規則を知ると怒り出すお客様もおられます。2度と使っていただけないこともある。でも、それはそれでいいと思うんです。

——それが床の伝統の良さということですね。

久保 そうなんです。鴨川の納涼床は江戸時代初めの記録にあるくらい古い。当時は電気がなかったから、夜は上に提灯

を吊るし、下に行灯を置く。今でも比叡山のてっぺんから床を見ると、欄干のライトを伴って、とても幻想的な雰囲気です。大戦中は灯火管制で一時中断して戦後の高度成長期に復活しましたが、戦中の反動か、けばけばしい床もたくさん現れましてね。それで皆、危機感を持つようになった。ですから保勝会の総会でも毎回話すんです。我々は占有料という「罰金」を払って床を営業させてもらってるんやで、と。許可をもらったから「何でもできる」んやなくて、逆に「何にもできない」のやで、と。

——厳しいお考えですね。

久保 でもこれくらい厳しくやってこそ、初めて伝統文化を守れるんじゃないでしょうか。自分の店だけが流行ればいいのではなく、川べりで腰掛けたり散歩をしたりしておられる方々が床を見上げた時、「ああ涼しそうやなあ、私も行ってみたいなあ」という気持ちになれるぐらいの全体の雰囲気づくりをするのが、私たちの務めだと思っています。

——鴨涯保勝会では、近年はどのような取り組みをしておられますか。

久保 毎年5月25日、鴨川納涼床の清祓式を行っています。老朽化の進んだ床に感謝の気持ちを表す意味で、八坂神社さんにお祓いの儀式をお願いしているんです。八坂神社と納涼床との間には切っても切れない縁がありましてね。祇園祭の御輿洗いの川が鴨川なんです。その御輿洗いの神事に加わる町衆をもてなすため、近辺の料理屋が川の中へ床几を持ち込んだのが納涼床の発端らしい。パンフレットでも床の営業内容だけでなく、歴史や文化についても工夫を凝らして紹介するようになりました。そういう地固めをしながら伝統を守っていくこうと。協賛団体の「鴨川を美しくする会」が行う清掃活動のお手伝いもさせていただいています。

よく遊び、よく学んだ同志社時代

——こうしてお話をうかがっていますと、工学部のご出身というイメージとあまり結びつかないように感じます。学生時代のお話を少しお聞かせいただけますか。

久保 私、中学校からずっと同志社なんです。学校集会を開いて制服を廃止させ

たのは私の高校時代ですよ。結構遊びましたし、いろんなことをしましたね。ただ私の父親は「学校に行かせてやっつてい」というのが口癖でした。それで停学や留年にでもなれば父にひどい目に遭いますから、高校時代はいかに先生をヨイショして我が身を守るか、などということに一所懸命でした（笑）。

——工学部にはどのようなきっかけで進まれたのですか。

久保 大学進学の段になって、父が聞くんです。「留年せずに卒業するのがいちばん難しい学部はどこや」。そんな学部は行きたないと言ったら、それなら大学へ行かずにすぐ働けと怒られました。中学、高校と6年間は遊んだんやろ、それなら大学では必死で勉強しろ、行かせてやるんやから親の言うところへ行け、と。それで化学工学科に入れられたようなものです。またこれが、えげつないほど厳しいところでした（笑）。「何でこんなに勉強せなあかんねん」と思うぐらい勉強して、何とか4年で卒業できました。——当時のキャンパスの様子はいかがでしたか。

久保 終わりにかけていたとはいえ、学生運動がまだ盛んな時代でした。学食でご飯を食べていたら機動隊が突然入ってきて、何にもしていないのに友だちと慌てて逃げたことも。逃げるとき背中にざつと熱いものを感じて、これは血や、えらいことやと思ったら、その友だちがこぼしたコーヒーだったとかね。本当の話ですよ（笑）。でも学生運動を目の当たりにして、大学や学生の躍動感というものを感じていました。先生方は大変だったに違いありませんけれど。

「自分さえ良ければ」をやめよう、

共存共栄で京都を盛り上げるために

——濃密な学生時代を送られたのですね。ところで今まで何度もお話に出ましたが、「自分さえよければいい」という考えを否定されるその信念は、どのように培われたのでしょうか。

久保 なぜか子どもの頃からそうだったんです。仕事をするようになってからも考えさせられることが多いですね。たとえば予約がいっぱいでお客様に他の店をご紹介する時、中には自分のところより

明らかに劣った店を紹介する人がいます。お寒い発想です。そのためにお客様が「やっぱりあんなのところがいい」と戻ってきてくださったとしても、私なら嬉しくはありません。鴨漕保勝会にもそのようなことが原因でクレームをいたしていると、ああこのお客様はトラブルのあった店だけでなく、京都そのものに2度といらっしやらないだろうなあと感じますね。自分の店で受けきれなくて他をご紹介するのだから、自分の店よりも良い店をご紹介しなければ、こちらの顔が立たないというものです。

近年はホテルも他の店や旅館とタイアップをするなど、互いに横のつながりを大事にし始めています。それは自分のホテルだけでなく、京都という街全体に次のお客様を呼ぼうという気持ちがあるからです。歴史の浅いホテルがそういう努力をしているのですから、京都の老舗はなおのこと、もっと広い視野を持たなければと思っています。

——本日はどうもありがとうございます。ありがとうございました。

上ノ山真佐子さん●臨床心理士、精神保健福祉士、NPO法人「サタデーピア」代表 NPO活動で精神障害者を支援する

精神医療・保健福祉の専門家としての仕事のほか、精神障害者への理解を深めるための活動を行うNPO法人「サタデーピア」を設立して5年。あらゆる立場の人が対等にそれぞれの役割を果たすというスタンスや、地域に根ざした活動ぶりに共感と支援の輪が広がっています。ご多忙な上ノ山さんを、JRR南彦根駅前近くで「サタデーピア」が運営する喫茶店「夢工房」に訪ねました。



うえのやま まさこ
1976年大学文学部社会学部福祉学専攻卒業。同年4月長岡病院ソーシャルワーカーなどを経て、1990年7月南彦根クリニック臨床心理士、精神保健福祉士。1999年12月NPO法人サタデーピア設立、2001年から同代表。2004年3月同志社大学大学院神学研究科博士前期課程修了、4月より同博士後期課程在学中。

**医療や行政の枠を越え
対等な立場で支えあう場を求めて**

——あたたかい雰囲気のお店ですね。

上ノ山 ありがとうございます。ここは精神障害を持つ方の共同作業所なんですよ。香り高いコーヒーや手作りのクッキーなどが自慢です。どなたでも来ていただけるお店なので、メンバーもスタッフも、接客や小物などの販売を通して地域の方とオープンに交流しています。

——今もご近所の方がふらっと入ってこられましたね。

上ノ山 精神障害って、まだまだ社会的な理解が不十分で、そのことが患者さんの症状をさらに悪化させている例も少なくないのですが、地域の方がここに来て実際に接してもらえば、ちよつと気の優しい、人づき合いが苦手な人なんだということが分かっていただけなんです。そして「となりのおやじさん」としていろいろと物言つてくださる。それがとて

もありがたいんです。このテーブルも椅子も、地域の方が材料の調達から加工から全て関わり、メンバーと一緒に完成させてくださったんですよ。

——そもそも「サタデーピア」を設立されたのはなぜですか。

上ノ山 精神科クリニックに、臨床心理士・精神保健福祉士として勤務し、多くの患者さんやそのご家族と接してきました。

精神保健福祉士は、精神保健福祉領域

のソーシャルワーカーです。さまざまな行政サービスを紹介するのも大事な仕事なのですが、「上から何かしてあげる」というスタンスに立った制度が多いため、時には専門家としての私も、障害を持つ方に対して、いわば加害者側に立たざるを得ないというジレンマを感じるようになってきました。

行政や医療とは違う枠組み、患者さんやご家族と対等な立場で、共に協力し合っただけでできないだろうか？その疑問が出発点です。

——具体的にどう行動されたのですか。

上ノ山 93年にクリニックで勉強会をスタートさせました。最初は、専門家対象の研修会と、患者さんやご家族対象の懇談会を別々に開いていたのですが、それをつなげて、それぞれの立場での体験を情報交換し合う勉強会としました。

——結果はいかがでしたか。

上ノ山 我々専門家が知り得る最新の情報を患者さんやご家族と共有することは患者さんの回復につながり、患者さんやご家族の体験を知るとは我々の専門的

ケアの向上につながることを実感しました。診てあげる、もらう、教えてあげる、もらう、の上下関係ではなく、専門家、患者さんやその家族、ボランティア：いろいろな人が対等な立場で、それぞれの役割を担って参加することでより大きな成果をあげることができました。これは現在に至る「サタデーピア」の一貫したスタンスでもあります。

自分たちが必要なことは自分たちで考え、行動しようという意識で、この「夢工房 i f」の前身である喫茶店を始め、少しずつ希望を現実に変えていくうち、我々も地域の社会資源の一つになろうじやないか、ということと、99年にNPO法人格を取得しました。

——「夢工房 i f」の運営以外ではどんな活動をしておられますか。

上ノ山 精神障害者への理解を広める研究会や講演会を開催したり、会員自身が講演の依頼を受けたら、一般の患者さんやご家族の悩みを聞く相談業務も行っていきます。

講演も相談業務も、専門家だけがしているわけではありません。必要に応じて患

者さんのご家族も経験を活かして積極的に関わっておられます。

患者さんの家族同士が交流する場って少ないんですよ。特に精神障害の場合は社会の無理解から家族が肩身の狭い思いを強いられることもあるため、名乗りにくく、なかなか情報交換ができないので、こうした形でその「場」を提供したいと思っています。

「良心」に基づいて行動することがとても大事な時代だと思う

——ところで上ノ山さんは現在、大学院神学研究科にも在学中なんですね。

上ノ山 今年から博士過程の後期課程に入り、週1、2回、今出川キャンパスに通っています。研究テーマは「対人援助の倫理」。「援助したい」と思う心の源、損得勘定や経済的価値以外の価値とはなにかを探りたいと思っています。

私は、援助する人、される人、どちらが偉いというのではなく、人間同士が助け合い、つながりあうためにそれぞれの役割が与えられていて、人はその役割を果たしているだけなのではないかと思っ

ているんです。たまたま援助する側にいる人は、むしろそのことに感謝すべきなのではないかと。

——上下関係のない、対等な立場。それぞれの役割。「サタデーピア」のあり方とつながっていますね。

上ノ山 そう。考えていること、行っていること、全部つながっているんですよ。

同志社で学んだことも今の活動に深くつながっていると思います。「良心」に基づいて行動するというのが同志社教育の基本だと思うのですが、今はこれがとても大事な時代なのではないでしょうか。どんな仕事であっても、どんな分野であっても、「良心」に基づいて行動できるか。今の時代、それはもしかしたら「右へならえ」の風潮とは逆の行動となるかもしれない。でも、一人一人がどれだけ「良心」を大切にできるかが問われていると思います。

またNPOの持つ自主性・民間性・進取気鋭の精神。誰が認めなくても自分が大事だと思ふことをやる。上からの押し付けを良しとせず、自分にとって大事なことを見極めて行う。これらも同志社の

精神につながっていると思います。

ローカルかつユニークな活動で地域の「回復力」を高めよう

——うつ病や、それによる自殺など、精神の病気が社会問題化しています。このことをどうとらえておられますか。

上ノ山 病気の発症はバイオロジカルな要因によることが多いとされており、いつの時代も発症数はあまり変わらないと言われていますが、「地域」や「家族」が本来持っていたはずの回復力が失われた結果、患者さんもご家族も追い詰められ、孤立して、軽度のうちに治癒することが少なくなつたのではないかと見えます。

幼児虐待や、子供による「事故」と言ってもいいような犯罪が増えた背景も同じではないでしょうか。学校現場での教育相談もしているのですが、「子供が変わつた」と言われるけれど、もちろん周囲も変わっているんです。この現実はどう対処するのか、大人が知恵を出し合わないと。上から大きく施策としてかぶせるのではなく、それぞれの地域で、それ

が必要なることを、小さなグループでやっていく。そんなローカルでユニークな活動が「地域力」を高めるのではないのでしょうか。

——なるほど。上ノ山さんの中ではやはり全てがつながっているんですね。

では、今後の活動の展望を教えてください。

上ノ山 「サタデーピア」の経済的な自立度を高めたいですね。相談業務を事業化して、コンスタントにサービスを提供すると同時にスタッフの給料も出せるようにしたいと思っています。

「サタデーピア」は、肩書きなしの私たちが仲間と共同してやりたいことに取り組める場。今後、私たちの地域で、私たちが必要だと思う、新しいことにも取り組んでいくと思います。一緒に活動してくださる方ももちろん、いろいろな形で見守ってくださる方が増えると嬉しいですね。

イベントなどを開催し、みんなでコツコツ積み上げてきたことが形になるたび、「やっててよかった」と心から思う日々です。